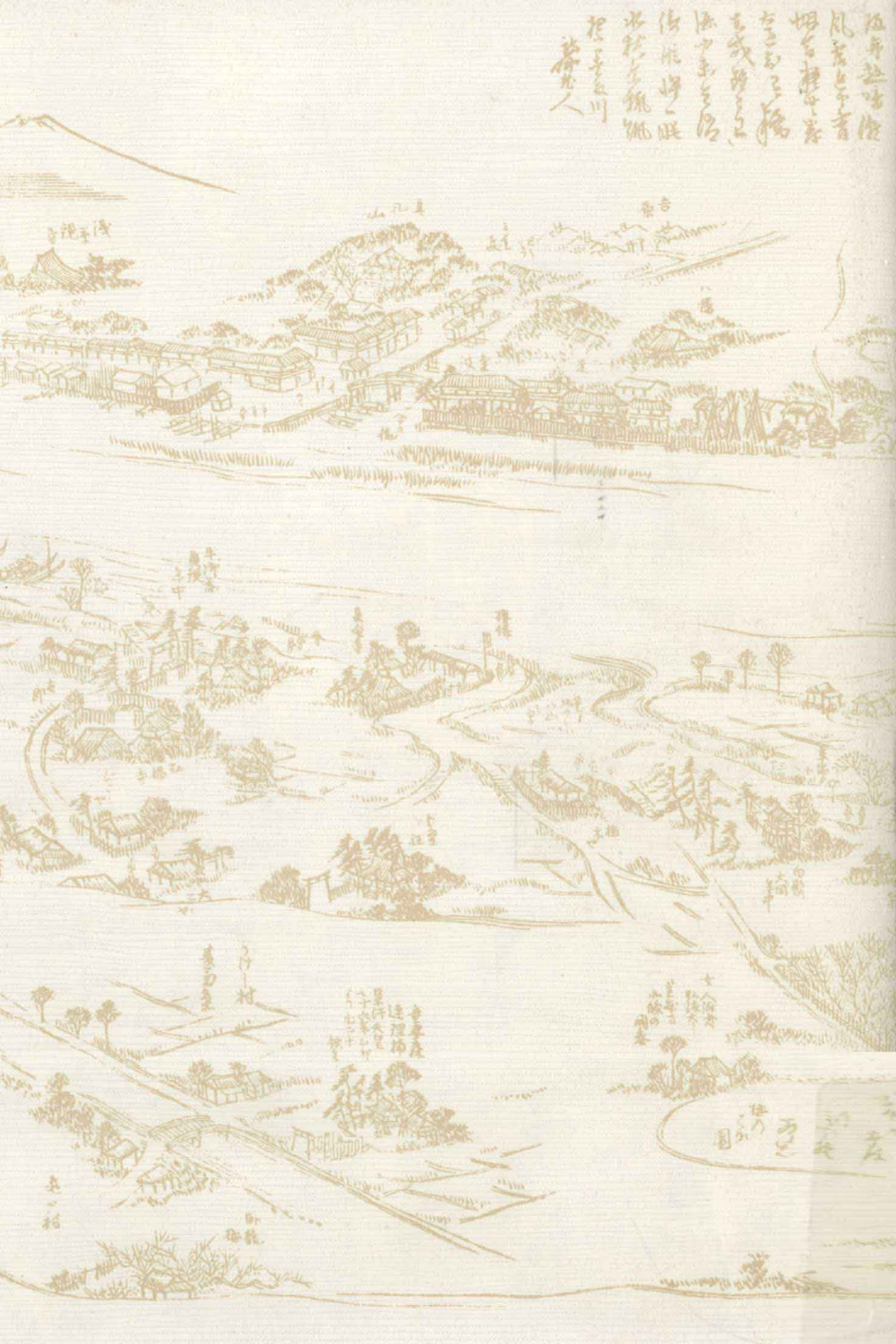

隨筆百花苑

第十二卷

森銑三
野間光辰
中村幸彦
朝倉治彦
編

中央公論社

隨筆百花苑　第十二卷

定價　四八〇〇圓

昭和五十九年二月十日印刷
昭和五十九年二月二十日發行

編者　森銑三
　　野間光辰
　　中村幸彦
　　朝倉治彦

發行者　高梨茂

印刷者　山田博

發行所　中央公論社
〒104 東京都中央區京橋二―八―七
振替東京二―三四
©一九八四　檢印廢止
ISBN4-12-401132-6

隨筆百花苑　第十二卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

叙言　野間光辰
凡例
しろがらす　紫雲尼　一三
洞房古鑑　竹嶋春延　二五
北堂夜話　一四三
種くばり　高柴三雄　一五三
翠箔志　一九一
閑談數刻　田川屋駐春亭　二三七
筆じやみせん　記露齋龍頭　三〇五
解題　三四一

敍言

野間光辰

本卷は、最初「花街演藝篇」として、京・江戸の遊廓・岡場所、また歌舞伎・歌謠に關する書を收めるつもりであったが、收錄を豫定していた二代目市川團十郎白筵關係の書を省いたために、見らるる如き內容のものとなった。もっとも、投節の唱歌を注解した『筆じやみせん』の一書は、歌謠書といえばいわるるかも知らぬが、投節は島原を代表する唱歌であったから、これをも含めて、『隨筆百花苑』第十二卷「花街篇」とする。

收載の書七部、これを地域別に分かてば左の通りになる。

京都關係

一、しろがらす　寫一冊

もと島原の太夫もろこし、法名紫雲尼筆錄。元祿初年頃成るか。

一、筆じやみせん　寫一冊

記露齋龍頭作。貞享二年九月十七日奥書。

一、翠箔志　寫一冊

元文初年成る。文化八年再寫。

江戸關係

一、洞房古鑑　寫八冊

新吉原江戸町一丁目名主竹嶋仁左衞門春延筆錄。寶暦四年三月誌。

一、閑談數刻　寫四冊

一名「近世奇人傳」。田川屋駐春亭聞書。

一、北堂夜話　寫一冊

筆者不詳。

一、種くばり　寫一冊

高柴三雄（英）筆錄。

まず京都關係の分では、『しろがらす』と『筆じやみせん』が、島原の廓の全盛を背景に書かれたもの。前者は、もと太夫であった作者が客との思わく・やりくりの手管（てくだ）を、後輩の上郎のために書き記した諸分祕傳書。後者は島原の投節の唱歌の注解書。島原關係の書物は數多いが、中でもこの二部の書は珍しい。これに對して、祇園・八坂・丸山・宮川町・木屋町・北町の各處に散在する茶屋女・白人・藝者・影子等について記したものが『翠箔志』で、一種の地誌的・細見記的性質を帶びる。これまた珍し

いものである。

次に江戸關係の分では、『洞房古鑑』と『閑談數刻』が、吉原に關するもの。前者は筆錄者の竹嶋仁左衞門が名主になったのがきっかけで、役職上の必要から、吉原開基以來新吉原以後の、歴史・地理・制度・取締・出入・訴訟等百般の記錄を、自己の手控として書き留めたもの。名主退役隱居の後も養子仁左衞門に引き繼がれたものらしく、記事は天保十年頃までに至っている。數多い吉原の文獻の中でも、五町の町内自治の實態を知る上で貴重な資料である。續く『閑談數刻』は、一名「近世奇人傳」ともある通り、文化より天保頃に至る全盛期の吉原を背景に、廓の内外を賑やかにした文人・墨客、風流人や藝能人等の行狀・逸話を聞書したもので、やや記錄的なものに偏した嫌いある本卷の中では、最も樂しい讀物である。

最後に『北堂夜話』と『種くばり』の二書は、江戸の岡場所關係のものとして收めた。前者は、少女時代を深川に送った筆錄者の母なる人の昔話の聞書である。後者は、天保改革によって廢止せられた江戸岡場所を圖說したもの。嘗て永井荷風が自ら一本を手寫したという書で、岡場所研究の好資料である。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

凡　例

一、収録にあたって、作品の配列は成立年順とした。

一、本文については、それぞれ信頼しうる善本によって校訂し、疑點については他本を参照するなどして補正に努めた。

一、漢字は正字體を使用し、古字、別體字、俗字などは通行の字體に改めたが、底本の字形をそのまま殘す必要のある文字はそのままとした。

一、底本に句讀點は施されていないが、讀み易いように適宜これを施した。また漢文の句讀點、返り點、連字符についても、必要に應じて補ったものもある。

一、原則として、送り假名、振り假名は底本のままとしたが、濁點は、讀み易いようにこれを補った。

一、假名の古體、變體、合字などは通行の字體に改めたが、平假名、片假名の別は底本通りとした。

一、原則として、脫字、衍字、誤字、宛字は底本通りとしたが、その作品の特殊性を考え、固有名詞や明らかな誤字などは訂正するか、または行間に正しい字を（　）で添え、不明の場合は（ママ）とした。

一、本文中の校訂者による注記は〔　〕で示し、本文と區別した。

一、底本の蟲喰い、破れ、汚れなどで判讀不可能の場合は、推定字數だけ□□を重ねて行間に注記し、推定可能の場合は、行間にその文字を示した。

一、底本に改行のない場合は必要に應じて改行した。

一、底本の簡單な書入れや注は、本文の該當箇所に（　）して插入し、欄外に記された數行にわたる補記は、その該當箇所の行間に和數字を付し、その項目の終りに掲出した。

花街篇

責任編集　野間光辰

しろがらす

紫雲尼

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com